



ARTRAMBLE

学芸員の視点	02
—学芸員の視点による教育普及事業— 相良周作	
特別寄稿	04
ぼくは、「美術の中のかたち」と こんな風につきあってきた — 光島貴之	
ショート・エッセイ	06
未完成の魅力 ギュスターヴ・モロー展 — 江上ゆか	
トピックス	07
2005県展、生誕100年 吉原治良コーナー、 廻変われば	
美術館の周縁	09
美術館と学校の連携 — 吉田朋子	

当館では今年1月、阪神淡路大震災からの復興10周年を記念した国際的な公募展「兵庫国際絵画コンペティション」を開催しました。世界81カ国から2,979作家による7,992点の応募があり、2段階の審査により、大賞1点を含む11点の受賞作が選ばれました。そして展覧会終了後、受賞作はすべて当館に收藏されました。

このなかには3点の日本人作家による作品が含まれていましたが、地元関西在住の美術家として唯一、賞を獲得したのが、この作品を描いた詫摩昭人です。

詫摩昭人は1966年生まれ。1990年代の初めから関西を中心に発表活動を続

ける作家です。コンセプチュアルな傾向の強い作風から、近年より絵画的な表現へと移行し、今回この大作が審査員の注目を集めたのです。

ヨーロッパ滞在の経験から日本と西洋の土壌の違いに注目した画家は、「絵の具が乾く前に一気に横幅2m以上の筆で上から下に筆を走らせ」と述べています。モノクロームな絵具の物質感による奇妙なイリュージョンが見るものの視角を覆いつくすところに、この作品の魅力があると言えるでしょう。（速水 豊／当館学芸員）

コレクションから

詫摩昭人(1966～)

《逃走の線 1》

2004年

油彩・布 210×480cm

兵庫国際絵画コンペティション優秀賞受賞

平成16年度美術品等取得基金購入

一学芸員の視点による 教育普及活動 相良周作

この文章を読まれている方々は、「教育普及活動」と聞いて、まず何を思い起こされるだろうか。いや、そもそも美術館の活動について、どういった像をお持ちなのだろうか。美術館だから展覧会を開催する、美術作品を収集し保管する、いずれもそのとおりだ。ではそれ以外は。

たとえば展覧会関連の講演会や解説会、シンポジウム、展覧会にちなんだ演奏会などが挙げられるだろう。子ども向けのワークショップなども最近では活発に行われている。展覧会に直接関連しないものであれば、たとえばアトリエでの美術講座や連続形式の鑑賞講座などもある。

考えてみると、展覧会自体が美術に関する「教育普及活動」とも言えるだろう。たとえば、展覧会が企画されることによって、それまで知られることのなかった作家の

存在が明らかになったり、今までとまったく異なる作家像があらわれてきたりする。作品や作家のさまざまな側面を、展覧会の機会に知ることができるのだ。しかしなかなか展覧会をそうした観点でとらえてもらえてはいないように思われる。

そもそも、美術館を正しく「社会教育施設」ととらえている人はどのくらいいるのだろうか。はなやかな展覧会の陰にかくれてしまいがちな小さな展覧会、常設展示、そうしたもののなかにも、それを企画した人々の思いやメッセージを読み解き、理解し納得することができる。しかし展覧会を見てもらわなければ、そのメッセージはまず伝わらないだろう。美術館の存在を知ってもらい、その活動を知ってもらうことが、もっとも重要な課題となる。近年、全国の美術館で来館者の数が厳しく問われているのも、ひとつにはここに起因していると思われる。

私はこの3月まで、「教育支援・事業グループ」というセクションに在籍していた。このセクションは、当館における展覧会以外の事業全般に携わっており、学芸員が2名配属されている。昨今の美術館では、「美術館教育」と称して、大学等でそれを専門的に履修してきた人を学芸員として採用する流れになっているようだが、当館では今のところ、美術館教育を正式に履修・研究してきた人が学芸員として採用されていない。美術史あるいは実技系で採用された学芸員が、輪番制で担当しているというのが現状である。このことは、一部では「美術館教育の専門家による事業展開が図れない」といった批判にもつながる可能性があるが、見方を変えれば、美術館の総合的な役割を理解するためには、専門にかかわらずさまざまな業務を広く行った方が良く、ということも言えるだろう。

「学芸員の視点」ということで今回私が書くのは、美術館教育の専門家ではない一学芸員が、3年間の教育普及業務の中で思ったり感じたりしてきたことである。立場自体が現在の潮流からすればいささか中途半端であるので、内容も完全には同意しがたい部分があるかも知れないが、仕事を中途半端にしてきたわけでは決していないので、その点をお含み置きいただければ幸いである。

先述の教育支援・事業グループの学芸員2名の役割は、大まかにいって成人を対象とした事業（ミュージアム・ボランティアや美術講座など）と、学校に所属する児童・生徒・学生及び教職員を対象とした事業（団体鑑賞の解説やこどものイベント、博物館実習など）に大別される。私は3年間にわたって、後者の方をもっぱら行ってきた。いきおい、学校との接点、とりわけ学校の先生方とのやりとりが多くなる。

学校の先生方というのは、学校教育のプロフェッショナルである。しっかりとした教育理念を持ち、児童・生徒の傾向を熟知し指導する。とりわけ当館が所在する神戸市では、小学校3年生から図画工作の専科制を設けており、実技と教育の過程を履修した先生方がその職務にあたっている。その熱意には感服するばかりであるが、先生方が必ずしも美術館に対して理解があるわけではない。



新宮晋《通かなリズム》を鑑賞する。

先生方の多くは、児童・生徒を美術館に連れてくることに躊躇しているように思える。美術館は敷居が高く、おとなしく作品を見せておくことが困難に思えるのか。鑑賞に際しての多くの約束事が、児童・生徒への制約と受けとられて、自由な学習への取り組みが妨げられるとされているのか。

しかし実際に先生方と話をしてみると、校外学習に児童・生徒を連れ出すこと自体の大変さを思い知らされた。美術館に来て解説込みで作品を鑑賞しようとすると、最低でも1時間はかかる。学校と美術館との往復だけでもやはり1時間以上かかるとなると、昼食のことを考えなければいけない。学校での給食をストップするのか。弁当を持参させるのか。弁当はどこで食べるのか。雨の日はどうするのか。

先に述べた、「先生方が必ずしも美術館に対して理解があるわけではない」ということは、別に批判的な気持ちからだけで出たのではなく、先生方が単に美術館のことを知らないということでもある。このことは、美術館の行っている「教育普及活動」が、まだまだ浸透していないことを物語っている。

先日、神戸市内の某養護学校に勤務する先生から、「美術館がここまでしてくれるとは思わなかった」ということばをいただいた。共通の事業を手がけてきた関係で、お互いに以前から面識があったのだが、学校の教員と美術館の学芸員という立場の違いからか、変に意識し合っていたようで、私はその先生とはほとんどともに話をすることがなかった。ところが、その学校の生徒たちが車いすを使って当館に見学にくることになり、その学校の別の先生が私に相談しに来られた。展示室は3階だが、一般来館者用エレベーターは車いす2台までしか乗れない。人数は20名近く。こちらからは荷物用エレベーターの利用を勧めた。これなら一度に全員乗れる。エレベーターの運転は美術館の職員が行い、そこまでの誘導はミュージアム・ボランティアが行うことで話が決まった。それ以外に、食事の場所についても、水回りが完備した屋根付きの部屋ということで、アトリエ1を提供した。こうした一連の調整が済んで、無事鑑賞が終わったあとで、以前から面識のあった当の先生の口から思わず出た

学芸員の視点

ことばが「美術館がここまでしてくれるとは思わなかった」であった。この瞬間、おそらく先生の中で美術館に対する何かに変化したのだろう。それ以降、特に変な意識をお互い持つこともなくなった。

もちろんこれはひとつの例であり、すべてがこのような良い結果になるわけではない。こちらの対応に不満を持たれた先生がいっしょだったこともある。次の年度に来館してもらえなかった学校もある。しかし、できるだけ先生方と積極的に協議し、要望を可能な限り聞き出し、来館当日の充実感を少しでも味わってもらいたいという気持ちで、先生方とは接してきた。職種が違って、美術に携わり、あるいは美術館に対して肯定的な考えを持っていることではお互い共通していたとも思う。これらの体験は、私自身にとっても非常に貴重なものであった。

博物館実習生に「地域に根ざした美術館施設活動への提案」という題でレポートを書いてもらったとき、多くの実習生が、当館ですでに実施している、あるいは実施したことのある事業を提案してきた。彼らもまた、当館の活動ひとつひとつすべて把握しているのではなかった。「教育普及活動」の周知不足を実感した。実習の中で私は、「ではそんな良い提案がなぜ実行されていないのか」という疑問をぶつけ、彼らに自分たちの問題としてディスカッションしてもらった。行き着く先のたいは「金銭的」なところに落ち着いてしまった。美術館の現実を思い知らされた瞬間であった。

ほかにいろいろと思い当たることはあるのだが、いつのまにか紙面が尽きてしまった。もう1年同じ仕事を続けていれば、自分なりに満足もできただろうが、輪番制の中、各学芸員が教育普及活動に対しての共通認識を持つためには、新しい血が脈打つのも必要なだろう。願わくば、自分のやってきた3年間が何らかの形で継続していつもらえれば幸いである。

（さがら・しゅうさく／当館学芸員）

ぼくは、「美術の中のかたち」と こんな風につきあってきた 光島貴之

東京に、さわる美術館「ギャラリーTOM」ができた1984年頃から、美術作品、特にさわれるものを探し求めて、野外彫刻展などを散策していた。美術館にも足を運び、さわれそうな彫刻などをなんとかして手にしたいとあせっていたが、館のハードルは高かった。イサム・ノグチの石彫を、白い手袋をして京都の近代美術館でさわったのも、御堂筋の道路沿いに設置されたボテロの『踊り子』を木枯らしの中でかじかむ手でさわったのもその頃だった。

まもなく、名古屋市美術館や、兵庫県立近代美術館でさわれる企画展が始まった。ぼくは、とてもしゃいだ気分になってそれらの展覧会を訪れた。いまでも覚えているのは、92年の『美術の中のかたち』だ。田中昇さんの石の作品をさわって、その印象を文章に残していた。ぼくは、見えないということにこだわっていた。拙文を紹介しながら、その当手を振り返ってみたい。館内には、小学生の団体が来ていた。



「美術の中のかたち―手で見る造形:光島貴之がみる近代彫刻」
(2002年12月4日～2003年3月16日)会場風景

■手の中の虹

ぼくが、気に入った『虹』という石の作品をゆっくりさわっていると、小学生らしい団体がガヤガヤと入ってきた。

「さあ、みんな触って、触って」

という指導員らしい人の声にはあっけにとられてしまったが、暫くしてその中の2、3人がぼくに近寄って来て、子どもどうしてなにやらヒソヒソ話をしている。

まもなく、「なにしてんの?」とぼくに問いかけた。

「見えへんからさわってるんや」

なんとか、そう答えてみた。子どもの素朴な質問には、即座に答えるのが難しいものだ。あっけにとられて、思いが言葉にならないうちに、その場面がすぎさってしまう

こともよくある。(中略)

今度は、「これ、なに書いてあるの?」と、点字のキャプションのことを聞いているらしい。「これはね」と指で読み聞かせていると、次は、「これは?」と、どうも活字の文章を読めと言っているようだった。

「これは、おっちゃんには読めへん」と言うと、

「見えへんの、かわいそうやなあ」と返してきた。これはたいへん、見ええないのが“かわいそう”なんて思われては、ぼくが“かわいそうな人間”になってしまう。あわてた。(中略)

ぼくは気をとりなおし、もう一度この『虹』をしっかり手の中におさめ、頭の中で形を再現できるまでさわり続けた。冷たくて気持ちいい、石で作られた虹の橋をたどっていくと、雨に出会い、さらに上へ手を伸ばすと、雲が手にさわれる。

子どもの頃、みんなが「虹が出てる!」と言っているのを聞いて、虹の方向を一生懸命見ようとするのだが、なんとなく見えるような気もするけど、本当には見えていなかった。その時に見えなかった虹を、ぼくは手の中に包み込んで、ほっとした気分になって美術館を後にした。

当時、美術作品はぼくにとって、ひとつの安らぎであったのかもしれない。しかし、「安らぎ」なんて言葉を、頑として拒絶していたので、美術こそ、新しい価値観をぼくの中に持ち込んでくれるものと信じていた。そしてそれは、半分ぐらい真実だった。

最近見、見えなくても、文字による情報は、かなり入ってくるようになった。コンピュータの発達により、パソコンが文字を読み上げてくれるようになり、テキストデータのやりとりには苦労しなくなった。しかし、画像情報は圧倒的に不足している。そういう感覚的な部分で、新しいもの、自分の生活経験では得られないものを、吸収していく手段が視覚障害者には少ない。だから、こういう美術展に出かけて、かたちのおもしろさに触れたり、コンセプチャルな表現に出会うのは、とても重要だ。

あときささわった『虹』のかたちは、ぼくの中に染み込んでしまったように思う。その水脈は、いまのぼくの描く大きな作品の根底に流れているのかもしれない。

■密かな思い

震災の明るる年、96年、県立千葉盲の生徒作品や、おっさんの作品などをさわった。ぼくも粘土造形をしたり、ラインテープで描くようになっていた。そして、密かな野心が芽生えた。美術館で、作品を発表できるようになりたいなあ、と思った。そんなこと考えても、無理やなあと思ひ、打ち消してはみたが、だれにも告げない秘密の野心として存在し続けた。

98年秋、「アート・ナウ '98ほとばしる表現力ー『アウトサイダー・アート』の断面』という展覧会に出品。いよいよ美術館での発表のチャンスだ。しかし、さまざまな障



特別寄稿

「美術の中のかたち―手で見る造形:杉浦隆夫『みんな手探り』」(2005年7月16日～11月3日)を鑑賞する光島貴之氏

害者の圧倒的な表現力の中で、ぼくの絵は、埋もれてしまっているように感じた。まだまだ、自分の絵のよさも客観的に評価できず、自信もなかったのだ。

このごろ、あときの「アート・ナウ」で見ましたよ、という話を聞くことがある。見てくれている人は、ちゃんというものだと思えて喜びを感じる。続けて描いていてこそ喜びだ。

■収蔵庫に入る

02年、新築された兵庫県立美術館で、「光島貴之がみる近代彫刻」という展覧会を、「美術の中のかたち」で企画してもらった。収蔵庫に入り、多数の作品をさわった。その中から、ぼくの感覚を呼び覚ますようなブロンズを選んだ。それをモチーフにしてぼくなり平面を制作した。そして、それらをブロンズと一緒に展示したのだ。

いつかこの展覧会で、ぼくの作品が展示されたいなあと思ってきたことが10年越しに現実のこととなった。なんと幸せなことだろう。1人の鑑賞者であるぼくが、作り手となって美術館の箱を満たす役割を果たした。

■空間を埋めるつぶつぶ

今回訪れた「美術の中のかたち」は、「杉浦隆夫『みんな手探り』」というこれまで刺激的な展示になっていた。ぼくは、いつの間にか1人の鑑賞者から作家になってしまい、おまけにこのようなエッセイを書いている。それに伴って、鑑賞の方法もずいぶん変わってきた。美術館巡りを始めた頃、さわることがすべてだった。しかし、さわれないものも世の中にたくさんあることを実感し、言葉による鑑賞も試みるようになった。なんでもさわればいいという時代は終わった。さわだけの企画展は、姿を消していった。

「美術の中のかたち」は、さわるといふことだけに突出した企画ではないだろう。だからこそ毎年継続されてきたと思う。さわるといふ感覚が、五感の1つとしてあたりまえに評価され、アートにおいてもそれなりの役割を果たしてほしい。もちろん、美術から遠ざけられてきた障害者に配慮した展覧会であり続けてほしいのは、いうまでもない。

最後に、今回の展示の感想を書いてこの文章を終わりにしたい。

さわるといふ企画なので、受付で腕時計や、指輪などを外すように言われるのはあたりまえだが、今年は、ウエストポーチやポケットの中のもの、携帯などもすべて受付に

預け、さらに、ポケットにガムテープで目張りをするという厳重な準備が必要なのである。なぜなら、スチロールの粒が服の中に入り込まないように、あるいは、持ち物をプールの中に落としてしまわないようにするためだ。

緩やかなスロープを上り、折り返して下りのスロープを行くと、途中から、水ではなく、発泡スチロールの粒状の球体がさわさわと足下から増加してくる。発泡スチロールのプールに入るのだ。普通の水のプールでは、見えていないと水の動きが分からない。ところが、このつぶつぶのプールでは、普段は感じられない水の動きがぼくにも分かる。進む前方のつぶつぶが盛り上がり、自分の後ろのつぶつぶが低くなっていくのがさわって分かるのだ。水の動きも瞬時にはこういう風に見えるのだろうか。

暫く行くと、ブロンズの作品が沈んでいる。どれもさわったことがあるものばかりだ。知るが故のつらさ。ぼくがワクワクするために、財政難ではありませんが、新しい作品を所蔵してください!!とつぶやいてみた。

そんなことを言っているところではない。新しい発見があった。ぼくが描いたフォートリエの『トルソ』は、つぶつぶに包まれて、すぐやさしい作品になっていた。ムーアの『母子像』や、関根伸夫の『メビウスの環』などは、その空間の部分、つまり腕と体幹の間や、環の中につぶつぶが充満していて、その空間を意識することができた。

普通にさわっていると、空間にはなにもないので、その存在感は伝わってこない。見えていると、抜けている部分の印象が、ハッキリ意識されるのだろうが、さわっていると、手が素通りして次の部分に飛んでいく。空間の認識があいまいになる。手の滑りをつぶつぶが遮ってくると、意識を空間にとどめてくれる。

おもしろい!! もしかしたら造形の空間認識を新しいやり方で試してみられそうな気がしてきた。つぶつぶはなくても、ゆっくり手を動かしてみたら、空間を認識できるかもしれない。

(みつしま・たかゆき／美術家)

1954年京都市生まれ。先天性緑内障のため、10歳の頃に視力を失う。1995年頃から「さわる絵画」の制作を開始し、国内外の美術館、

ギャラリーで多数の展覧会を開催している。

光島ギャラリー <触覚で世界を描き出す>

http://homepage3.nifty.com/mitsushima*

対話しながら絵を鑑賞するグループ:ミュージアム・アクセス・ビュー

<http://www.nextftp.com/museum-access-view/index.html>

* 2017年3月現在のURLは下記の通り。
<http://mitsushima.art.coccan.jp/>

未完成の魅力

ギュスターヴ・モロー展

フランス国立ギュスターヴ・モロー美術館所蔵 2005年6月7日～7月31日

江上ゆか

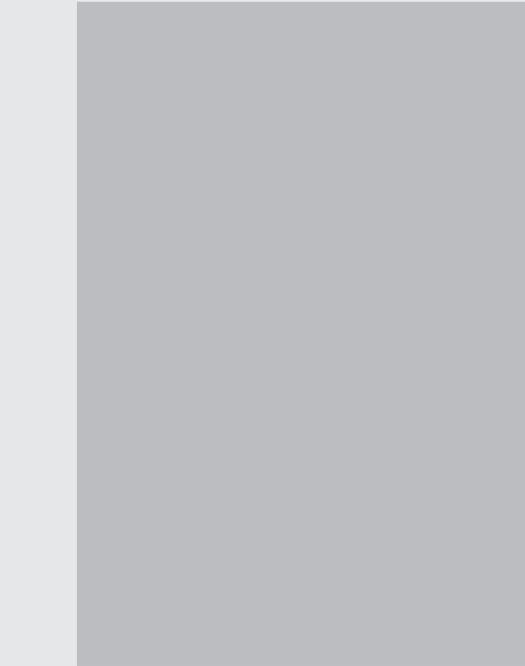
このたび開催したモロー展は、サブタイトルのとおり、パリにあるギュスターヴ・モロー美術館の多大な協力を得て、同館の所蔵品により構成されたものである。周知のようにこの美術館は、モローの没後アトリエに残された膨大な数の作品が、画家の遺志により建物ごと国家に寄贈され、開館に至ったものである。現在公開されているだけでも6000点を越えるという所蔵品は、そのほとんどが習作か、あるいは完成をみぬままアトリエに残されたもの、つまりは未完成の作品である⁽¹⁾。

こんにちの鑑賞者にとっては未完成が、イコール認めがたいものということにはならないだろう。今回の展覧会に関する記事にも、「未完成」をむしろモロー作品の魅力と捉え、紹介いただいたものが複数ある⁽²⁾。一方で来場者からは、緻密に織り上げられた完成作の少なさを残念がる声もあった。展覧会の成り立ち上、避けがたいことではあったが、構成や告知にもっと工夫ができたかもしれない、という反省は残る。

言うまでもないことだが、アカデミックな歴史画家でありたいと願っていたモローは何も、抽象表現を先取りしようとして未完成の作品を残したわけではない。後年のわたしたちがそれに魅力を感じようが感じまいが、モローは未完成、つまりは自身の属するアカデミックな美学からすると認め難いものを、一堂に集めた美術館をつくろうとしたわけであり、あらためてこれは、相当に特異なことだと思う。そして実際のところモローの遺贈はずいぶん難航したし、ようやく開館したあとも閑古鳥が鳴いていたという（そしてアンドレ・ブルトンら一部のファンのみが熱狂した、というのが、しばしば語られる逸話である）。

「今宵1862年12月24日、私は自らの死を思い、私のいとおいしい作品の運命を思う、そんな全ての作品たちを、今なんとかして集めておかないと、ばらばらになれば消え去ってしまう、まとまっていれば私が画家としてどうだったか、そして私が心地よく夢を見た場所がどんなかを、少しは分かってもらえる。」⁽³⁾
モローは画家として名を成す前からすでに、自身の作品がまとまって残されることを夢想していた。その後、ほかにも案はあったようなのだが⁽⁴⁾、死の前年に認められた遺言状には最終的に「ラ・ロシュフーコー街14番地に位置する自宅を、そこに含まれるすべてのもの、即ち油彩、素描、カルトンなど50年の制作物と共に」国家に遺贈することが記されるのである。「このコレクションが、画家の生涯にわたる努力と制作の総体を常に立証しうるような全体性を保ちつつ、永遠に（これがわたしの切なる願いなのだが）ないし少なくともできるだけ長く保存される」という条件で。⁽⁵⁾

まとまって見られること、これが何よりモローにとっては重要だったようだ。手順を踏まえて段階的に絵をつくる過程で、同じ主題につきいくつもいくつも生み出されるモローの未完成作品には、たしかに未完成の作品群、とでも言いうるような性格が感じられる。油彩で、素描で、水彩で、執拗に繰り返され無数に折り重なる



ギュスターヴ・モロー（サロメ）のための構想画 1880～90年頃　油彩・厚紙　© Photo RMN / © Christian Jean

イメージ。そこから現代の鑑賞者が、ただ抽象的な色とかたちに目の快楽のみを見いだすとも思えない。どんな画像でもインターネットで瞬時に求め、コピー&ペーストを重ねうる現代であるからこそ、この画家の執拗な手つきはよりよく理解されるだろうし、またその「総体」の広がりとお行きも、より衝撃をもって受け止められるのではないだろうか。イメージの迷宮を彷徨うがごときモローの探求。画家が生涯をかけた「総体」がいまわたしたちに示してくれるのは、何よりそれ自体の未完、つまりは果てしなさ、なのかもしれない。

（えがみ・ゆか／当館学芸員）

- 本文では以下、少々曖昧ではあるが、習作と完成に至らなかった作品をあわせて、未完成の作品と称している。
- 森村泰昌「答えは求めず　心の闇をさまよう未完成の魅力」（『てんとう虫』7・8月号）、加藤義夫「未完に特徴　思索重視」（朝日新聞2005.6.24夕刊）、早瀬廣美「“未完成作”という可能性」（産経新聞2005.7.10）、田中真治「幻想の画家　未完への欲求」（神戸新聞2005.7.16夕刊）など。
- 《身づくろいをするタリラ》の素描への書き込み、本展図録に所収のマリ＝セシル・フォレ氏のエッセイ（宮澤政男訳）、P.11。なお同図録においては「12月」の部分が誤って「×月」となっています。この場を借りて、訂正とお詫びを申し上げます。
- 詳しくは1987年にオルセー美術館で開催された展覧会カタログ“Maison d'artiste, masion musée, l'exemple de Gustave Moreau”を参照。本文の執筆にあたっても同書を大いに参考とした。
- ギュスターヴ・モロー美術館パンフレット（1997年日本語版、隠岐由紀子訳）、P.42。



会場風景

ミュージアム・ボランティアが大活躍 「2005県展」

今年も8月13日（土）～9月3日（土）にかけて、県立美術館王子分館「原田の森ギャラリー」で「県展」が開催されました。今年は昨年より88点多い1105点の応募作品のなかから、厳しい審査により選び抜かれた201点の力作を展示しました。

今年の「県展」の特徴として、近年カルチャーセンター等で年配層に人気の写真、書、工芸部門の応募者・入選者が増大したことが挙げられます。「県展」にも、高齢化社会が反映されてきたということでしょうか。一方、応募者は多くなかったものの若年層の健闘が目立ったのも今年の特徴で、受賞者35名のなかに高校生が4名含まれています。

この「県展」では、5年前から、応募作品の受付や審査の補助など展覧会の運営面において、ミュージアム・ボランティアの参加を仰いでいます。今年からは会場の監視もミュージアム・ボランティアにお願いしました。今年「県展」にかかわったミュージアム・ボランティアはのべ約280名にのぼり、もはやミュージアム・ボランティアの存在なくして「県展」は語れなくなりました。今後はミュージアム・ボランティアにより深く運営に参画していただき、「県展」を県民主体のアート・フェスティバルへと発展させていきたいと考えています。
（平井章一／当館学芸員）



ミュージアム・ボランティアのための事前研修会

特集展示 生誕100年 吉原治良コーナー

本年は、吉原治良（1905～1972）の生誕100年にあたります。大阪の名高い商家に生まれ、のちに兵庫県武庫郡精道村（現・芦屋市）に移り住んだ吉原は、戦前から関西を代表する前衛画家として活躍しました。また、戦



会場風景

後は若い美術家たちを率いて「具体美術協会」を結成し、国際的な活動を展開したことで知られています

そこで今回、吉原の生誕100年を記念して、展示室のワン・コーナーを使い、当館のコレクションと寄託品から選んだ計16点の作品をまとめて紹介しました。寄託品のなかには、戦前の二科春季展出品作や未公開のデッサン、絵皿など珍しい作品もあり、見どころのひとつになっています。

欧米の最新の美術の動向を意識しつつ、独自の表現を求めさまざまな様式を試みた吉原の半世紀に及ぶ画業は、日本の近代美術の歩みを象徴するものといえるでしょう。今回のこのコーナーの近辺には、吉原と同時代を生きた日本の美術家たちの作品や、吉原の教え子ともいえる「具体美術協会」の会員たちの作品も展示しています。これらもあわせてご覧いただきながら、吉原の作品に漂う独特の高潔でモダンな雰囲気に触れていただければ幸いです。
（平井章一／当館学芸員）

処変われば

新発見!初公開!なんとも小気味の良い響きである。ただ、価値あるものはいつまでも埋もれてはいない。放っておいても、いつの間にか耳目の集まるところとなってゆく。開催中の「新シルクロード展」には、新疆ウイグル自治区と西安市近郊で近年に発見されたシルクロード関係の初公開資料が30点近く展示されている。その多くは既に研究者たちに高く評価されているが、中国内においても未だ一般公開には至っていない。これらの資料が逸早く日本で初公開となったのは、発掘調査における日本の協力と関係者の努力に拠るところが大きいが、出現したモノたちの存在の強さが作用した結果であるともいえないだろうか。

これらの資料は、従来の慣習に従えば博物館での展示が妥当だろう。それが美術館と名のつく場所で公開されることにより、別の視線がそそがれることになった。例えば「木製ミイラ」と名付けられた遺体に似せた実物大の人形は、私などにとっては過去に目にしたいいかなる造形とも異なり刺激に溢れてみえた。推測でしかないが、葬るべき遺体が無く、弔うに際して生きていたときの故人の姿をモデルに造ったものだとすれば、そこには作り手の感情が多分に含まれているのではないだろうか。このところこれらの資料を前にして、振り子のように過去と現在を行きつ戻りつしながら過ごしている。

（岸野裕人／当館学芸員）

<p>●——編集後記</p> <p>●今年の夏は、また一段と暑かったですね。この原稿を書いているのはお盆過ぎですが、うだるような残暑が続いています。そんな中、当館で開催中の二本の展覧会は、暑氣払いをもってこいでた。ひとつめは、光島貴之さんのエッセイでもご紹介いただいた「美術の中のかたち」です。目にも爽やかな白いプールに入れば、さらさら気持ちいい感触に全身包まれるでしょう。中には当館自慢のプロンス彫刻が、なんと5体も埋まっています。そして、もうひとつの「新シルクロード展」では、2000年以上もの時を経て蘇った赤ちゃんミイラや、さらに昔のぶきみな木製ミイラが皆さんをお出迎え…。本号が出る頃はもう涼しくなっているかとは思いますが、是非どうぞ。</p> <p>（岡本）</p>	<p>兵庫県立美術館 quarterly report ART RAMBLE vol.8</p> <p>2005年9月20日発行 編集・発行：兵庫県立美術館 〒651-0073 神戸市中央区臨浜海岸通1-1-1 印刷：岡村印刷工業株式会社</p>
--	---

トピックス

美術館と学校の連携 ——渚中学校の研究授業

吉田朋子



美術館前の交差点からみた渚中学校

美術館の周縁

当館では随時、学校の団体鑑賞を受け入れている。その規模は、10人以下から600人のものまでさまざまである。特に入場者数の多い特別展では、一般来館者にご迷惑をおかけせず楽しむようにと祈りながら、児童生徒を会場に送り出す。公共の教育施設たることは美術館の大切な使命の一つであるので、来館者のご理解をお願いするばかりである。鑑賞の前には事前レクチャーを希望されることも多い。学年や内容に応じて、展覧会を担当している学芸員に依頼したり、あるいは団体鑑賞担当者自らがスライドショーを用意したりして、なるべく充実した時間となるように努力している。また、実際の進行には館ボランティアの協力も欠かせない。学校の先生方の側も、下見や事前指導、ワークシートの作成など当日までに様々な準備を重ねられている。実施回数・関係者数から見ると、団体鑑賞は、美術館と学校との連携において最も大きな部分を占めているといえるだろう。

しかし、学校と美術館の共同作業は、団体鑑賞とはちがった形を取ることもある。今年7月初めに、エントランスに突如として変わったポスターが登場したことにお気づきの方もいらっしゃるかもしれない。実は、これは美術館の向かいにある神戸市立渚中学校の生徒が制作した美術館の宣伝ポスターなのである。

渚中学校は、全校生徒あわせても200人足らずの小さな中学校だ。開校は平成10年と、まだまだ若い。徒歩1分の近さもある、すべての特別展毎に全校生徒が来場してくれている。ちなみに、当館に車で来られる方がカーナビを使用される場合、「兵庫県立美術館」でヒットしないことがあるが、その際は「渚中学校」をご案内すると良いと聞いたこともある。実に当館に縁の深いこの学校が行った研究授業の成果の一つが、件のポスターなのだ。

話が持ち込まれたのは、5月のこと。神戸市の先生方の美術科研究授業にあたって、美術館に隣接する渚中学校は、立地条件を生かした授業を行うことを要請された。そこで、担当の谷野功治先生が立てられた計画は、3年生が授業の一環として制作中だった紙粘土フィギュア「自分の10年後」を美術館に置いて撮影し、館の宣伝ポスターを作る、というものであった。グループ毎に一枚のポスターを制作し美術館でプレゼンを行うので、館側も講評を出して、実際に「採用」されるポスターを一枚選んで欲しいとの依頼を受けたというわけである。

それにしても、美術の授業でフィギュアを作るとは、筆者にとっては隔世の感である。デジカメやパソコンといった機器を中学校で使いこなしているというのも、いまや当然なのだろう。さらに、東京在住でプロのフィギュア作家であるDEHARA氏の協力も得られることになったという。大変面白い企画なので、館職員やボランティアにも投票と講評への参加を呼びかけ、採用ポスターは何らかの形で館内に掲示することをお約束した。

その後数度の打合せを重ねる一方でフィギュア撮影の美術館ロケを敢行し、プレゼン当日の6月14日を迎えることとなった。兵庫県立美術館の歴史と建物について短いレクチャーを行って活動の意味を明確にした後、いよいよ総勢8グループのプレゼンである。神戸市の先生方23名に加え、当館からは職員6名と館ボランティア6名が出席した。これだけの大人の前で、4分の持ち時間の中で、フィギュアの説明をしてポスターの狙いを伝える、というのは中学生たちにとっては難しいことだろう。館側の出席者とDEHARA氏が、講評を述べながら一枚ずつ投票し、決選投票までもつれた末に「採用」されたのは、屋外に設置された今村輝久の作品を取り込んだ作品となった。講評が予想以上に真剣かつ詳細であったことは、司会を行った筆者にとって大変印象的であった。

谷野先生によれば、今回の授業で生徒達にとって最も刺激となったのは、自分たちの作品について、学校外の人々から率直な意見を聞くことができたことであったという。特に、同じ作品に対して人によって全く異なる意見が出るという事態を新鮮に受け止めることができたようだ。それが美術館という場だからこそ達成できたものであれば、喜びに堪えない。

今後も、美術館ならではの学校との連携のあり方を様々に探っていきたい。そのとき、渚中学校はきっと、心強い存在でいてくれるであろう。そして、兵庫県立美術館もそうありたいと願っている。

(よしだ・ともこ／当館学芸員)



プレゼン風景(2005年6月14日)